

件によりマイケル・ホイが企画、脚本・監督・主演した香港のドタバタ・コメディ映画「半斤八両」(1978)を押して付けられ「死亡遊戯」とのバックで同時に輸入した。そして、翌年の1979(昭和54)年、東宝東和は「半斤八両」を「Mr.Boo!ミスター・ブー」という邦題で全国公開し、福岡でも上映された。

マイケル・ホイは「半斤八両」よりも先に、「鬼馬雙星」(1974)と「賣身契」(1976)を企画・脚本・監督・主演していて、東宝東和は「半斤八両」がヒットしたことで、これら3本を「Mr.Boo!」のシリーズとして、同じ1979(昭和54)年に「半斤八両」を「Mr.Boo!ミスター・ブー」、「賣身契」を「Mr.Boo!インベーター作戦」、「鬼馬雙星」を「Mr.Boo!ギャンブル大将」という邦題にして順次公開した。1979(昭和54)年は、ブルース・リーのカンフー映画に続く香港のコメディ映画「Mr.Boo!」シリーズがヒットし、日本国内の香港映画への関心がますます高まった。

ブルース・リーのカンフー映画に続き「Mr.Boo!」シリーズが日本(福岡)でも公開された1979(昭和54)年、ジャッキー・チェン主演の「ドラゴンモンキー酔拳」(1978)と「スネーキーモン

キー蛇拳」(1978)が日本(福岡)で公開された。(製作は、「蛇拳」が先だった)ジャッキー・チェンは、この2作品で独自のコミカルなカンフー映画を打ち出し、ブルース・リーの香港カンフー映画を継承する新たなスーパー・スターとして世界に名を馳せていった。

80年代にはジャッキー・チェンのカンフー映画が次々に公開され、日本でも人気がヒートアップしていった。1980(昭和55)年はジャッキー・チェン自らが監督した「クレイジーモンキー笑拳」(1979)とロー・ウェイプロダクション在籍時代の主演作「精拳」(1978)、アメリカ・ハリウッドに進出して主演した「バトルクリーク・ブロー」(1980)が公開された。

1981(昭和56)年、ジャッキー・チェンは自身2作目のハリウッド映画「キャノンボール」に出演して世界的なアクションスターの地位を確立するなか、ジャッキー・チェン主演の旧作「少林寺木人拳」(1976)と1980(昭和55)年に製作したジャッキー・チェン監督・主演2作目「ヤングマスター師弟出馬」が公開された。

また、ジャッキー・チェンの人気が高まる一方で、すでに他界したブルース・

リーの人気も相変わらずだった。「ドラゴン危機一発」「ドラゴン怒りの鉄拳」「ドラゴンへの道」「燃えよドラゴン」



「死亡遊戯」が福岡市及び近郊の映画館(というより日本じゅうの映画館)で再映され、すでに他界しているブル

ス・リーが主演する新作「ブルース・リー死亡の塔」や「燃えよドラゴン」と同じ年に製作された、ブルース・リーまがいのカンフー映画「帰ってきたドラゴン」(1974)まで公開された。とにかくこの年は、ブルース・リーとジャッキー・チェンの香港カンフー映画が邦画、洋画に劣らず大ブームになった。

1982(昭和57)年もジャッキー・チェンの人気はさらに高まっていた。日本未公開だった「龍拳」(1978)とジャッキー・チェン監督・主演作「ドラゴンボール」(1982)が公開された。福岡市及び近郊の映画館では旧作の「少林寺木人拳」「ドラゴンモンキー酔拳」「拳精」「スネーキーモンキー

蛇拳」「クレイジーモンキー笑拳」「龍拳」「バトルクリーク・ブロー」「ヤングマスター師弟出馬」「ドラゴンロード」そして「キャノンボール」が再映、再々映され、ジャッキー・チェンの特集プログラムを組む映画館もあり、年間をとおしてどこかの映画館でジャッキー・チェンの主演・出演作が上映された。おそらく、これまでの日本(福岡)の映画館史においてひとりの俳優が出演した映画が1年間にこれほど多くの映画館で上映され続けたのはジャッキー・チェンをおいていない。次号に続く

博多とアジアの映画 123

松 浦 仁

1986（昭和61）年に福岡市及び近郊の映画館で公開されたアジア映画は5本だったが、それは日本（東京）の映画館で公開された長編劇映画のわずか1.5%にすぎなかった。映画館で公開されるアジア映画は珍しかったが、地方都市である福岡市で上映されるアジア映画はもっと稀だった。

1986（昭和61）年に福岡市及び近郊の映画館で公開されたアジア映画5本はすべて香港映画だった。ジャッキー・チェン主演作2本（『醒拳』、『サンダーアーム』）、龍兄虎弟（『少林寺』シリーズ1本（『阿羅漢』）、この年からはじめた『靈幻道士』シリーズ2本（『靈幻道士2』、『キョンシーの息子たち！』）だった。映画館は6館で上映され、封切りが3館（福岡東宝（3本）、シネマ1、東映グラウンド）、再映画が3館（東映パラス（2本）、筑紫映劇、ステーションシネマ）だった。70年代から80年代の約10年にわたリ、ブルース・リー、ジャッキー・チェン主演作をはじめ香港映画は日本国内の上映本数も上映館も右肩上がり得上昇していたのだが、この年は香港映画の製作本数が減ったのか日本に輸入すべき良質の作品が少なかったのか、香港映画が飽きられたのか、それとも何か他に理由があったのか、以前の年

に比べると激減した。

今振り返ると、この年1986（昭和61）年はたんに福岡市の映画館（おそらく全国的な傾向にちがいない）で香港を中心としたアジア映画の上映本数が減少したというよりも、福岡市の映画館だけでなく自主上映や映画祭を含めた（福岡市とアジア映画）の過渡期であったし、見方を変えれば新しい発展を予感させる年でもあった。

アジア映画が福岡市の映画館で上映され注目を集めたのは、1955（昭和30）年に製作されカンヌ国際映画祭でヒューマン・ドキュメント賞を受賞したインドのサタジット・レイ監督によるオプー3部作の1作目『大地のうた』だった。製作から10年後の1966（昭和41）年に日本アート・シアター・ギルド（ATG）が配給し、福岡ではATGのチェーン館だった福岡宝塚会館7階の福岡東宝名画座で公開された。日本との合作映画を除いて福岡でもヒットした最初のアジア映画だった。さらに、福岡東宝名画座では4年後の1970（昭和45）年に『大地のうた』に続くオプー3部作の2作目『大樹のうた』（1958）を公開した。1966（昭和41）年と1970（昭和45）年に福岡市の映画館で公開された、フランスの革新的な映画運動であるヌー

ヴェルヴァーグを彷彿とさせるインド映画に福岡の多くの観客は驚嘆したことだろう。（本誌、『博多とアジアの映画（24）及び（25）』参照）

そして、アジア映画（香港映画）が福岡市を含めた日本ではじめて受け入れられて大ヒットしたのが1973（昭和48）年に公開された『燃えよドラゴン』（1973）だった。ブルース・リーというアジア出身のスターに熱狂し、香港のカンフー映画が若者を中心にブームとなり、社会現象にもなった。『燃えよドラゴン』の公開直前にブルース・リーはすでに他界していたのだが、翌年の1974（昭和49）年には完成していたが日本未公開だったブルース・リー主演作『ドラゴン危機一発』（1971）と『ドラゴン怒りの鉄拳』（1972）、1975（昭和50）年には『ドラゴンへの道』（1972）が公開された。さらに1978（昭和53）年には撮影半ばでブルース・リーが他界したため未完となっていたが5年後にブルース・リーの代役を起用して完成させた『死亡遊戯』（1978）が公開された。『死亡遊戯』が日本で公開された1978（昭和53）年、日本に輸入・配給した東宝東和は『死亡遊戯』の配給権を獲得するために『死亡遊戯』を製作したゴードン・ハーベストからの一方的な条